

# 大学生に望む

学長 小原 芳明

大学での学問は「？」に始まり「！」に終わります。大学を Higher Education だけではなく、他に Higher Learning とも言うように、大学は高度な学修を行う場です。しかし、ここでの学修は今までの教育と同様に、その基盤にある5つのW (what, when, where, why, who) と1つのH (how)という6つの「？」から始まるのです。そのほかに2つのW (which, whom) を加えることで、君たちの知的好奇心はより満たされることになります。

私たちの先人たちも知的好奇心を満たすために多くの課題に挑戦してきました。そしてその結果が社会に蓄積され、今の高度情報化社会となっているのです。また、『論語』の「温故知新」にあるように、過去から受け継がれてきた知識に学ぶことも大学です。ここにはそうした知識が集積されています。これからの学修で自分が抱く疑問を解決する知識を得るのですから、その学び舎に対して

## Enter with Respect, Leave with Knowledge

の心構えは基本です。どの時代にあっても、学問への畏敬と謙虚さは学修の基本とされてきました。

人間は各自に必要な衣食住確保のために働く存在ですが、その必要性から解放されて生じた時間が「ヒマ」です。ラテン語の *scole* には「ヒマ」という意味がありますが、その暇（余った時間）を活かして「読み、書き、計算」を身につけさせようと思われたのが *scole* (学校) の始まりです。そのことは今でも続いていて、過去との違いは学修する時間数がより増えてきていますが、学校教育の根底にあるのは子供たちが将来社会で働いていくのに必要な知識と技術を修得することです。

今君たちは大学でさらなる学修のスタート台に立っていますが、こうして大学で学ぶ機会（学修に必要な「ヒマ」）を親から与えてもらえたことへの感謝の気持ちを大切にしてください。

これからの大学機会を「あと4年もある」と観るか、それとも「4年しかない」とするかでは大きな差が出ます。昔から「少年老い易く、学成り難し」と言われていますが、学問の道は遠く、また険しいものです。中学校の数学で学ぶ方程式に  $x+y=a$  がありますが、これを日常生活に当てはめると、二つの作業を「ながら」ではなく、どちらか一つのために時間を使うということの大切さが理解されるでしょう。学修のために得られた時間を、自分で管理することで高等教育は全うされるのです。

近代の大学は社会へ出ていく移行期間です。そのために多くのリソースが大学に集積されていますが、それらを有益に活用するには、まず各人が将来社会でどういった人材になりたいのかの夢を持つことです。昔からこの丘で学ぶ生徒と学生を「玉川っ子」と呼んでいます。そして玉川っ子には「一画多い夢」を持ってもらいたいと創立者は願っていました。また、吉田松陰も夢の大切さについて次のように言っています。

---

**夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、  
計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。  
故に、夢なき者に成功なし。**

自分の夢（大志）を描き、その実現へ向けて大学で学ぶという道は厳しいでしょう。しかし、その厳しさを乗り越えてこそ、新しい時代に相応しい新しい知識と技術を修得できるのです。それは社会人としての評価へと繋がるのです。その意味で、大学では君たちが自分の課題を持って必要な知識をアクティブに学修することが鍵となります。

高等学校と異なり、大学では「1単位を1時間の授業に対して教室外で2時間の学修（予習と復習）」の計3時間を15週に渡って行うという45時間を基本としています。授業時間割表の「空き時間」は、予習と復習のための時間です。

すべての科目には授業計画（シラバス）が用意されていますので、これからはそれに従って君たちはより主体的に学修していくこととなります。君たちが大学での授業スタイルに馴染み、よりアクティブに勉学を進めていくことを促進するためにFYE（First Year Experience）科目が用意されているのです。

社会（日本国内外）活動では、一層の自己管理が求められます。その一つは自分の健康と安全の確保です。日本社会の国際化にともない、昔のような「日本の水と安全はタダ」ではなくなってきています。本学の周辺街も、昼から夜への状況の変化は著しく、夜は決して安全で健康的であるとは言えません。ひと時の快楽への誘惑も一段と強くなってきますが、そうした勧誘に打ち勝とうとする気持ちが、大学生としての自覚と責任です。社会へ巣立つ前の4年間をさらなる自己管理能力を身につける機会としてください。

この丘では大学生の他に、3歳の幼稚園児（K）から高校生（12年生）までの玉川っ子たちも一緒に学校生活を送っています。そうした玉川の教育環境を踏まえ、今日から最高学府に学ぶ者としての自覚、誇り、そして責任を持ってこの丘での生活を送ってください。